

平成二十六年度夏季

全国大学国語国文学会 第一〇九回大会案内・要旨集

期日・会場

五月二十四日（土）

フェリス女学院大学緑園キャンパス

五月二十五日（日）

県立神奈川近代文学館

後援

公益財団法人神奈川文学振興会

県立神奈川近代文学館

○同封の葉書に出・欠をご記入の上、五月十二日(月)までに必ず着くようにご返送ください(ご欠席の場合も必ずご返送をお願いします)。

○五月二十四日(土)の、昼食代(一,〇〇〇円/委員のみ)、懇親会費(一般八,〇〇〇円、大学院生四,〇〇〇円)、レジユメ資料代(一,〇〇〇円)、五月二十五日(日)の昼食代(一,〇〇〇円)は、同封の郵便振替用紙(口座番号/〇〇二〇〇一〇一〇一九四七、口座名称/竹内正彦研究室)にてお振り込みください。

○出張依頼状が必要な方は、提出先の宛名と送り先を明記の上、左記の当学会事務局へお申し出ください。

〒245-8650 横浜市泉区緑園四一五―三
フェリス女学院大学文学部日本文学科竹内研究室内
Eメール zenkoku.ferris2012@gmail.com
FAX 〇四五―三三〇―六〇六七

○大会一日目と二日目の会場が異なりますので、「ご注意ください」。

大会一日目 五月二十四日(土) フェリス女学院大学緑園キャンパス
〒二四五―八六五〇 横浜市泉区緑園四一五―三 (相鉄線「緑園都市駅」徒歩約七分)
大会二日目 五月二十五日(日) 県立神奈川近代文学館
〒二三一―〇八六二 横浜市中区山手町一一〇 (みなとみらい線「元町・中華街駅」徒歩約十分)

○なお、第二日目の会場である県立神奈川近代文学館では、四月五日(土)～五月二十五日(日)の日程で、「生誕一〇五年 太宰治展―語りかける言葉―」を開催しています。

第一日 平成二十六年五月二十四日(土) フェリス女学院大学緑園キャンパス

常任委員会(11時00分～11時30分) 七号館一階 七一〇二教室
委員会(11時30分～12時30分) 七号館一階 七一〇三教室

大会

受付 12時30分～

開会 13時～

会場 グリーンホール(八号館一階)

開会の辞

会長挨拶

会場挨拶

総合司会／本学会常任委員・宮城学院女子大学名誉教授

本学会会長・京都市立芸術大学名誉教授

フェリス女学院大学学長

犬飼 公之

中西 進

秋岡 陽

公開シンポジウム(13時10分～17時00分)

テーマ「太宰治―作品の舞台と風土―」

基調講演(13時10分～14時10分)

太宰治―明るい方へ―

作家

太田 治子

パネルディスカッション(14時30分～17時00分)

パネリスト

太宰治における〈風土〉の意味―作品『津軽』を中心に―

大阪府立大学非常勤講師

岡村 知子

太宰治と山梨―井伏鱒二との比較を中心に―

大東文化大学専任講師

滝口 明祥

「東京」の使い方―織田作之助の「大阪」を補助線に―

大阪大学大学院准教授

斎藤 理生

コーディネーター・司会

フェリス女学院大学教授

島村 輝

懇親会(17時30分～19時30分)

会場 フェリス女学院大学緑園キャンパス食堂アンデレ

会費 一般 八,〇〇〇円 大学院生 四,〇〇〇円

第二日 五月二十五日(日) 県立神奈川近代文学館

受付開始 9時00分

研究発表会 会場 県立神奈川近代文学館展示館二階ホール

午前の部 (9時20分～12時10分)

総合司会／本学会常任委員・宮城学院女子大学名誉教授

犬飼 公之

ライトノベルの時間性―平坂読『僕は友達が少ない』における変化―

発表者／早稲田大学大学院生

國部 友弘

司会／フェリス女学院大学教授

佐藤 裕子

大江健三郎『同時代ゲーム』論―女優の力―

発表者／フェリス女学院大学大学院生

佐々木彩香

司会／早稲田大学教授

石原 千秋

太宰治「ろまん燈籠」論―「ろまん燈籠」の構造―

発表者／國學院大學兼任講師

吉岡 真緒

司会／早稲田大学教授

石原 千秋

高校生による『富嶽百景』の受容―『ウインターイルミネーション』を鑑賞する視点と照らし合わせて―

発表者／三重県立四日市高等学校教諭

大井 一郎

司会／本学会常任委員

原 國人

昼食・休憩 (12時10分～13時10分)

午後の部（13時10分～15時20分）

総合司会／本学会常任委員・奈良大学教授

上野 誠

指の血で書きつけた歌―『伊勢物語』第二十四段をめぐって―

発表者／國學院大學兼任講師
司会／本学会常任委員

津島 昭宏
原 國人

宝塚歌劇『夢の浮橋』に見る『源氏物語』受容―「傀儡」と「うた」を軸として―

発表者／早稲田大学大学院生
司会／大阪樟蔭女子大学教授

平田彩奈恵
中 周子

『源氏物語』「朝顔」巻の光源氏

発表者／大正大学教育開発推進センター特命専任講師
司会／早稲田大学非常勤講師

春日 美穂
吉井美弥子

総会（15時30分～16時30分）

授賞式〔学会賞／文学・語学賞／研究発表奨励賞〕

閉会の辞

本大会実行委員長／本学会常任委員／フェリス女学院大学教授

竹内 正彦

平成二十六年夏季

全国大学国語国文学会 第一〇九回大会 公開シンポジウム

テーマ「太宰治―作品の舞台と風土―」

日本近代文学を代表する作家の一人として、今日にいたるまで、若者にも年長者にも高い人気を誇る太宰治については、近年もさまざまな角度から研究が深められてきている。作家主体の形成とその文体への現れ方、その文学と社会との関わり、とりわけ左翼思想の影響の深さについての、新発見を含む探究などが進められ、太宰の作家像についての新たな知見が共有されてきた。

今回のシンポジウムでは、さらにもう一つの視角として、この作家が作品の舞台とした多様な土地とその風土を手掛かりとして、生涯にわたる〈個〉と〈周囲〉との関わりについて、共同の考察の場を持ちたいと考える。具体的には故郷・津軽、人生の転機となった山梨、文業の拠点としての東京などを取り上げつつ、さらに神奈川との関わりについても視野に加えて行きたい。

基調講演

太宰治―明るい方へ―

作家 太田 治子

パネルディスカッション

パネリスト

太宰治における〈風土〉の意味―作品『津軽』を中心に― 大阪府立大学非常勤講師 岡村 知子

太宰治と山梨―井伏鱒二との比較を中心に― 大東文化大学専任講師 滝口 明祥

「東京」の使い方―織田作之助の「大阪」を補助線に― 大阪大学大学院准教授 斎藤 理生

コーディネーター・司会 フェリス女学院大学教授 島村 輝

平成二十六年夏夏季

全国大学国語国文学会 第一〇九回大会

研究発表会 発表要旨

【午前の部】

ライトノベルの時間性

―平坂読『僕は友達が少ない』における変化―

早稲田大学大学院生

國部 友弘

平坂読『僕は友達が少ない』は「日常系」と呼ばれるジャンルに属するライトノベル作品である。「日常系」とは、他愛もない日常生活を描いた作品である。この「日常系」については、しばしば過去から未来へと進む直線的な時間の不在という特徴が指摘されてきた。本発表では、「日常系」ライトノベルとしての『僕は友達が少ない』が、単に直線の時間を欠いているのではなく、直線の時間と、それと対立する円環的時間が相互に生成しあうような、新しい時間性を表現していることを示すことで、ライトノベル研究に新たな地平を導入したいと考える。

「日常系」作品は通常、複数のショートストーリーによって構成されている。それぞれのストーリーは多くの場合時間的關係が不明瞭であり、単一の設定から生み出された無数の可能な物語の一つとして見ることができる。そして物語をそのように複数的なものとして見るとき、その複数の物語を横断するキャラクターは単一のものではなく、余剰が宿り、むしろそのことによって単独的なもの

として認識される。

こうした視点は物語の複数性に接する読者が持ちうるものだが、『僕は友達が少ない』の主人公である小鷹は読者と同じように、自身が送る日々を変化のない無時間的なものと見ている。これによって小鷹も読者と同様に、自身の物語の中に単独的な価値を見いだしていくことになる。この価値の獲得は作品において、変化のない世界の中に変化を、つまり円環的時間の中に直線の時間を導入する。しかし、それによって日常は終わりを告げるのではなく、そうした変化を設定の中に取り込み、新たに複数の物語を作り出していくのである。

ここでは単独的なものが、それを生み出した構造の中に再び分配されている。こうした単独性の働きは、ライトノベルにおける単独性の生起のみを強調する東浩紀の「ゲーム的リアリズム」に対して、新たな可能性を開くだろう。

大江健三郎『同時代ゲーム』論

―女優の力―

フェリス女学院大学大学院生

佐々木彩香

一九七九年に刊行された『同時代ゲーム』は、森の谷間を舞台にした大江作品の中でも、「特別な女性的存在」の持つ大きな力が取り入れられた最初の作品であったと考える。

『同時代ゲーム』の先行研究として主要なもの、加賀乙彦氏や菅野昭正氏の論のように「壊す人」の神話性について、また前田愛氏や栗原彬氏の論のように「村Ⅱ国家Ⅱ小宇宙」の多義的な構造を中心に論じられることが多かった。共同体における「特別な女性的存在」即ち「大いなる女たち」の力が注目されるようになったのは、

短編集『いかに木を殺すか』に関する高橋亨氏の論や、その短編集に収められた「もうひとり和泉式部が生れた日」についての島村輝氏の論などである。

本発表では、大江作品の「女性」研究では論じられることの少なかった『同時代ゲーム』の露巳を取り上げること、「特別な女性的存在」を含めた、女優性を発揮する登場人物の役割を論じたい。露巳の発揮する女優性は、「女性」に焦点を当てた一九八〇年代以降の大江作品の中で重要な役割を担う『人生の親戚』の「倉木まり恵」、『臆たしアナベル・リイ 総毛立ちつ身まかりつ』の「サクラさん」、『水死』の「ウナイコ」といった「女優」の登場人物の形象にも大きな影響を及ぼしている。

「壊す人の巫女」である露巳の女優性、身体パフォーマンスとしての力は、世間の規範により隠されているものを露わにし、挑発しながらも他者にポジティブな励しを与えていると考える。また彼女は自らの性的な媒介の力を使って、一見別世界の存在同士を結び付けながら、その関係性が生む力を共同体に帰結させている。最終的に露巳は超越的存在「壊す人」の母親となることで、谷間の循環を司り、「村Ⅱ国家Ⅱ小宇宙の神話と歴史」に自らの存在を書き込んでいると考える。

結論として、露巳は神話的世界の女優として、その挑発の力を使って周縁から中心に対し前向きに働きかけていることを指摘したい。

太宰治「ろまん燈籠」論

—「ろまん燈籠」の構造—

國學院大學兼任講師

吉岡 真緒

太宰治「ろまん燈籠」（『婦人画報』昭15・12〜昭16・6）には、「作者」を標榜する「私」と、入江家、入江家兄妹による連作小説という三つの空間があり、それらをどのように捉え関連付けるかが問題となる。本発表では三つの時空の連結を仮構するレトリックを明らかにする。

「ろまん燈籠」は、入江家の五人の兄妹による連作小説が断片的に引用されるドキュメント形式である。それぞれの断片の担当者／書き手（入江家兄妹）による注釈や創作過程が三人称形式で提示されるメタ・フィクション形式であるのだが、そのように提示された物語と注釈を「私」が書く／語る物語であることが「私」によって示されるといって複雑な構造を有している。作中作という舞台を設け、そこで展開する物語（虚構）とともに、その舞台裏（虚構）を提示することで署名者「太宰治」という物語（虚構）にリアリティを与えるこうした手法は太宰文学の特徴である。本テキストが位置するいわゆる太宰文学（中期）は翻案作品の宝庫であり、あえて引用元が明示されたうえで物語が展開するメタ・テキスト、メタ・パロディ形式の作品が多数書かれている。入江家兄妹による連作小説は太宰による創作なのだが、それが架空の作者による「剽窃」小説として引用されたことに、この時期の翻案小説群との連続性が見出しうる。

冒頭で物語の「作者」として「私」が登場したことで、入江家の人々の物語、および入江家兄妹による連作小説は、「私」が引用した物語であることが仮構される。引用とは、引用者の恣意による行為であり、こうした造形があるはずのない「私」の内面にあるかのように演出し、それが「私」と物語の連結の強度を仮構する。それによって入江家の四年前の時空と「私」がある「いま」が接続される。

高校生による『富嶽百景』の受容

—『ウィンターイルミネーション』を鑑賞する視点と照らし合わせて—

三重県立四日市高等学校教諭 大井 一郎

『富嶽百景』は、初出が「文体」昭和十四年二、三月号。『女生徒』（砂子屋書房 昭和十四年）に収録され、以後『思い出』（人文書院 昭和十五年）、『富嶽百景』（新潮社 昭和十八年）などに再録された。高等学校では、昭和二十八年以来、現在に至るまで、多くの国語教科書に掲載され、教室で読まれて続けて来た。いわゆる定番教材の一つとして、その地位は揺るぎない。定番教材が定番教材となる得る所以の一つは、いつの時代のどの高校のどのクラスの高校生をも、魅了する作品の放つ魅力である。国語科授業を通して、その魅力を分析し、作品・教材の新たな可能性を探る。

授業対象は、三重県立四日市高等学校一学年の生徒である。県北部の工業地帯に位置し、県北端にナガシマリゾート「なばなの里」（桑名市）がある。ここで、昨年十月から今年三月まで『ウィンターイルミネーション 冬華の競演 祝世界遺産富士』が催された。人工的な富士の四季を彩るすがたに、多くの人々が魅了され、特に週末の夕暮れ時から、近隣の道路が大渋滞するほど大人気であった。この「富士」を見て、太宰がどう思うか、どうコメントするか等を、交流させることにより、現代の高校生たちが、この作品のどのようなところに魅力を感じ、どのように作品を受容するのかを探った。

その魅力とは、太宰が、御坂峠から見た富士を「私はあまり好かなかった。好かないばかりか、軽蔑さえした。あまりにおあつらい向きの富士である。」と軽蔑し、「こんな富士では俗でだめだ。」と否定しきついている点である。江戸の浮世絵師たちが描いた富士と古来からの定番風景「富士三景」とを、断裁した反骨心と自らの心象と審美眼で風景を見る鑑賞眼こそが、権力や既成評価などに反発を

覚える時期の高校生たちに、大きな共感を得て、作品受容に繋がるのである。

【午後の部】

指の血で書きつけた歌

—『伊勢物語』第二十四段をめぐって—

國學院大學兼任講師 津島 昭宏

「梓弓」の段として知られる『伊勢物語』第二十四段は、研究史的に見てもしばしば問題とされてきた。離れた男を女が待ち続けた期間が「三年」とされる点や、男が詠む、「あづさ弓ま弓つき弓：」の解釈等が主たる争点となってきた。また、典型的な「待つ女」の物語であるためか、身を退く男を称揚する評、待ち通せぬ女を批判する評（あるいはその逆）等、読み手の性意識を反映する鑑賞も多く、それはそれで興味深い。古典教材の定番でもあり、教科書の方向性も男と女の心情を問いかけるものとなっている。ただ、そうした「心情」を問う前に、注目すべきはその劇的な物語の幕引きであろう。

清水のある所にふしにけり。そこなりける岩に、およびの血して書きつける。

あひ思はで離れぬる人をとどめかねわが身は今ぞ消えはてぬめる

立ち去る男を追う女は清水の湧く所に倒れ伏し、傍らの岩に自身の指から流れ出る血で歌を書きつけ、のちに絶命する。素直に物語を読んだ際に、このオーバーすぎる演出には目が留まるはずだ。しかし、ここについては女の煩悶の発露として理解されるばかり

で、あまり論点にされてこなかった。そもそも、本段の歌四首のうち、他三首が「いひ」出された歌であるのに対し、この歌のみが「書きつけ」られたものであることの意味は何か。また、指の血で岩に書き付けることの意味等、こうした問題はもつと考えられて良い。本発表では、民俗学的な知見を援用しながらも文学の用例を精査しつつ、「清水」・「岩」・「指」・「血」という素材が選び取られてくる意味を明らかにしたいと思う。男に向けられた女の祈り、誓いとして読み解いていきたい。その上ではじめて、先の「心情」というものが見えてくると考えるためである。

宝塚歌劇『夢の浮橋』に見る『源氏物語』受容

—「傀儡」と「うた」を軸として—

早稲田大学大学院生

平田彩奈恵

現代における古典作品の受容にはさまざまな形があるが、その多くは原典を読まない人々を対象としている。そういったものは現代的な価値観を織り込むなど、古典作品を忠実になぞるばかりではなく、時代に合わせた形が求められていると言える。本発表では、商業演劇である宝塚歌劇において二〇〇八年末から二〇〇九年初頭にかけて上演された『夢の浮橋』（大野拓史脚本・演出）をとりあげ、現代における『源氏物語』受容の一端を論じ、『源氏物語』そのものには書き込まれていない部分を「書き込み可能」な部分として表現者が活かしていることを指摘してゆく。

『夢の浮橋』は匂宮を主人公に据え、薫と浮舟との関係性を中心に描いた作品であるが、同時に「傀儡」という言葉を繰り返し用いながら、匂宮が否応なしに背負わされることになる、政治的立場にもふれている。一方で浮舟をはじめとする主だった登場人物の女性

や民衆は、束縛されない自由なものとして描かれており、宝塚歌劇の観客層をふまえた脚本作りがなされていると考えられるだろう。

さらに、『夢の浮橋』は「傀儡」をはじめ、物語のテーマを表現する手段として「うた」を多用する。ここで言う「うた」には、「和歌的な表現」から、単純に「音楽」としての「歌」まで様々なものが含まれるのだが、『源氏物語』本文で詠まれる和歌を直接利用する例は見られず、むしろ敢えてそのような表現を忌避しているようにも取れる言葉選びがされている。本発表ではいくつかの例を取り上げながら、『夢の浮橋』が『源氏物語』本文をなぞらず、独自の表現が追求されていること、その意図について検討する。

以上の考察を通し、「共有している知識・価値観に基づいた作品受容」という視点が、受容の研究において重要であることを確認する。また、「うた」を用いる点で『源氏物語』本文との親和性もある現代の作品を検討する意義にも言及してゆく。

『源氏物語』「朝顔」巻の光源氏

大正大学教育開発推進センター特命専任講師

春日 美穂

『源氏物語』「朝顔」巻冒頭、光源氏は、女五の宮、そして朝顔斎院との対面を目的に、桃園宮を訪問する。桃園宮は、式部卿宮死去により、すでに荒廃の様相を見せ、そこに住まう女五の宮も、古めいた老女ぶりを見せる。

それに対し光源氏は、女五の宮の様子を、「かしこくも古りたまへるかな」とやや皮肉めいた思いで見つめ、「うちかしこまりて」と、慇懃にふるまっている。

本発表では、女五の宮を取り巻く表現を、特に「古めく」を中心に検証し、女五の宮の様子が、当世風ではないものの、皇親らしい

あり方として描かれていることを明らかにする。また、故式部卿宮が桃園宮に住まう女五の宮の世話をしていたことに代表されるように、『源氏物語』内において、皇親同士の相互扶助の関係がみられることを確認する。

一方光源氏は、「式部卿宮に年ごろは譲りきこえつるを、今は頼むなど思しのためふもことわりにいとほしければ」と式部卿宮のあと、女五の宮の面倒を見ることを口にしていく。しかしこれは、紫の上方女房に対する朝顔齋院の元を訪問するための口実にすぎず、女五の宮の皇親らしいふるまいに対しても、光源氏は共感しきることができない。

研究史において、「朝顔」巻での女五の宮の登場や、この後の源典侍の登場は、桐壺院時代を想起させ、呼び込む効果があることが既に指摘されている。そうした巻で、女五の宮への違和感を感じる光源氏からは、既に皇親としての感覚を共有することができない姿が浮かび上がる。臣籍降下後の「ただ人」としての光源氏が、「朝顔」巻という桐壺院時代と密接に関わる巻において改めて据え直されることにより、桐壺院時代の真の後継者とはなり得ない光源氏の在り方を明らかにする。

平成二十六年年度夏季
 全国大学国語国文学会 第一〇九回大会 会場案内

大会一丁目 五月二十四日(土) フェリス女学院大学緑園キャンパス (相鉄線「緑園都市駅」徒歩約七分)



<お知らせ>
 みなとみらい線 元町・中華街駅の元町側の改札奥から6番出口(アメリカ山公園口)を目指してエスカレーター等で丘の上に登ると大変便利です。是非ご利用ください。

大韓民国総領事館
 神奈川近代文学館
 霧笛橋
 山手111番館
 大佛次郎記念館
 イギリス館
 横浜インターナショナルスクール
 岩崎博物館
 山手資料館
 山手十番館
 港の見える丘公園
 ポートヒル横浜
 交番
 横浜地方気象台
 外国人墓地
 愛の母子像
 フランス山
 駐輪場
 山下公園
 中村川
 山手迎賓館
 アメリカ山公園
 元町プラザ
 元町・中華街駅 6番出口
 元町→

みなとみらい線 元町・中華街駅下車 徒歩10分 ◎元町側改札口からエスカレーターまたはエレベーターで6番出口(アメリカ山公園口)へ進み、同公園を出て直進。外国人墓地正面入口で左折し、港の見える丘公園に向かいます。公園内南側の大佛次郎記念館を過ぎ、「霧笛橋」を渡ると神奈川近代文学館です。